

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報(A)

平4-40285

⑬ Int.Cl.⁵

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公開 平成4年(1992)2月10日

C 02 F 1/48
1/46B 6816-4D
Z 6816-4D

審査請求 未請求 請求項の数 1 (全3頁)

⑮ 発明の名称 電子励起水装置の水槽

⑯ 特 願 平2-148134

⑰ 出 願 平2(1990)6月6日

⑱ 発 明 者	佐 藤	幸 哉	三重県松阪市郷津町322番地20
⑲ 発 明 者	佐 藤	幸 哉	三重県松阪市郷津町322番地の20
⑳ 出 願 人	佐 藤	幸 哉	三重県松阪市郷津町322番地20
㉑ 出 願 人	小 川	法 子	東京都世田谷区若林5-17-15

明 細 書

1. 発明の名称

電子励起水装置の水槽

2. 特許請求の範囲

一般生活用飲料水の水道水又は地下水を金属磁器二重水槽とし、その金属磁器水槽の底部天然炭素材を安置しさらに、その天然炭素材の上部に素焼の磁器板にておおい、その磁器板を金属スプリングにて外上部蓋より、つるした構造の水槽に外部電子発生本機より発生した正弦波衝撃高電圧を印加して、その水槽内に満たした生活用飲料水の水道水又は地下水をアルカリ性に変えると同時にその飲料水内に溶け込まれているミネラル分(カルシウム、カリウム、ナトリウム、鉄、シリコン、ゲルマ、塩素、イオウ、リン…等)をプラス又はマイナスに電離させ体内に、すみやかに取入れ易くし各細胞内にて吸収しやすくすると同時に浄水場にて殺菌用に投入した塩素を除去することを目的とした電子励起水装置の金属磁器二重水槽とした水槽の発明である。

3. 発明の詳細な説明

本発明は飲料用の水道水に含まれている殺菌用の塩素を、除去分解すると同時に酸性化している飲料水をアルカリ性に移行させる。

飲料水に溶け込まれているミネラル分(カルシウム、カリウム、ナトリウム、鉄、シリコン、ゲルマニウム、イオウ、リン、塩素…等)をプラス又は、マイナスに電離(イオン化)させ体内で吸収しやすく味も良くするを目的としたものです。従来、口にする水道水や地下水は色々の条件が加わっているために水分子の構造化がきわめて悪く生体にとっては、あまり悪心が出来ないものであったが、この発明になる電子励起水は水分子の構造化がきわめて高く、通常の水と比べると生体にとっては非常に良い状態である。

水分子の構造とは水の分子の結合の状態をいっていることで、構造化されていない水とは水分子が少数で結合されてカゴ状をなしているか、水分子が一連の糸のように結合されているか、水分子が少数に成り水分子を中心にその分子に

放射状につながっている状態をいうのであって、結合エネルギーが弱いので、水分子が切れやすい状態に成っているものである。

それに対して構造化されている水とは、水分子が五角環、六角環とリング状に成っているものでエネルギー的な結合が強く、それ等にさらに外側で五角環、六角環の水分子が結合されたカゴ状の水と成っているものである。

電子励起水は、リング状に成っている五角環、六角環（構造化された水）の水を多く作ることを目的としたものである。

この電子励起水（構造化された水）を従来の装置で作ると電子励起発生本機と飲料水を満たす金属水槽と、その金属水槽を絶縁する磁器磚子付磁器水槽との二点より成りたっているものである。

そこで、当発明による磁器水槽を図によって説明をする。

第一図は、この発明による電子励起水装置の概略図であります。第一図の(1)は水を満たした水槽に電子励起電圧を加えるに必要な電子励

起発生本機であります。同じく(2)は本発明になる飲料水を満たすに必要な磁器水槽であります。(3)は水槽内に設置した天然堅木木炭であり(4)はその堅木木炭の上部に接触させた素線の磁器であります。(5)は磁器水槽内に満たした飲料水であり、(6)は磁器水槽内に吊した金属スプリングであります。(7)は電子発生本機より発生した励起電圧を磁器水槽内に送り込むに必要な接続導子線であります。(9)は、食品等も電子励起を受けることが出来るように設けた金属容器であります。(8)は、絶縁を高めるために、磁器磚子台を水槽の置台としている。(10)は磁器水槽の内側に張り付けた金属板であり、この金属板には穴を多数開けたものもあり得るし、でこぼこのおうちのものもあり得ます。

この電子励起水製造装置の励起水の製造原理は、一般使用されている乾電池の原理をまったく逆にしたものです。

乾電池は外側が金属で内部中心に炭素を封入しその空間に酸化物質を満たしたもので、その外

側金属と内部中心炭素との間に電圧が発生し電流が流れる。外側金属はマイナス極になり、内部中心炭素がプラス極になっている。

電子励起水製造装置は乾電池と同じ構造ですが、両極間の空間に水を満たし内部中心に置いた炭素に、衝撃高電圧を加えることにより両極間の空間に満たした水を、電解水に変えているものである。

従来の電子励起水製造装置は、金属水槽の為、壁や家具調度品等に接触もしくは近づけると絶縁が破壊され、水槽に加えられた高電圧が、アースされ効果が半減された。あるいは電子励起発生本機の破損等の事故があったが磁器水槽は磁器自体絶縁体であるので前記にのべたように、それ等に接触しても絶縁が破壊されることがなく、水槽に加えられた高電圧もアースされる心配もなく壁に近づけることが出来るので、場所をとらなく電子励起水を作ることが出来る。金属水槽方式ではなく樹脂水槽を使用して絶縁を保っている装置もあるが、この方法だと高電圧を水槽に印加している都合上、樹脂水槽の樹

脂が溶け出し飲料水としては、生体に有害で不適当なものになってしまう。

電子励起発生本機で発生する高電圧も電源トランスによる昇電圧発生方式もあり、半導体による昇電圧発生方式もあり得ます。

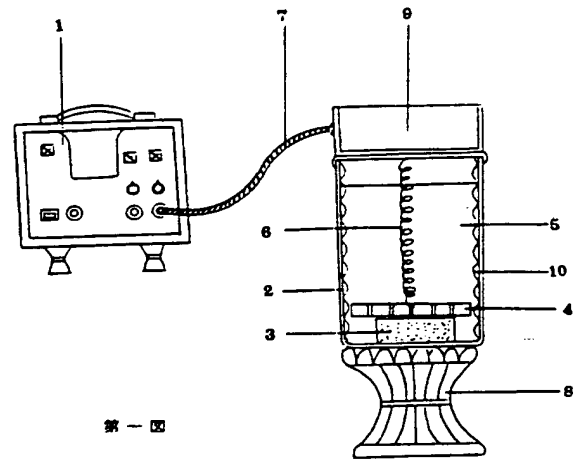
第一図の(6)は、高電圧を印加することにより電気振動を起こし容器内の電子励起水が振動するように工夫されている。又、電子励起水を容器内より引出す時にその流れを利用して容器内のスプリングが振動し、電子励起水に振動を与える事が出来る。

従来の電子励起水装置の水槽が金属製もしくは樹脂製であって、それぞれの欠点を持っていたものを、その水槽を金属磁器二重水槽として欠点をなくしたものの発明である。

4. 図面の簡単な説明

第一図は、当発明になる電子励起水の装置で電子励起水槽には金属磁器二重水槽を使用している概略図であります。

特許出願人 佐藤 幸 哉



第一図